

走る魂

海老沢泰久

Yasuhisa Ebisawa





文 春 文 庫

F 1 走 る 魂

定価はカバーに
表示してあります

1991年 6 月10日 第1刷

著 者 海老沢泰久

発行者 豊田健次

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町 3 — 23 〒102

T E L 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-741402-3

庫

F 1 走 る 魂

海老沢泰久



文藝春秋

F1 走る魂

1

一九八六年の七月初旬のある日、中嶋悟は岡崎市の自宅で一通の電話を受けた。

彼はこの年、ホンダ・エンジンを搭載したラルト・ホンダでヨーロッパのF3000レースに出場するためにイギリスに渡り、日本へはF2レースがあるときにだけ帰るという生活を送っていた。このときもそうで、六月二十九日にイタリアのムジェツロでおこなわれたF3000レースに出たあと、すぐに日本にとってかえして七月六日に鈴鹿サーキットでおこなわれた全日本F2選手権の第五戦に出場したのだった。

ムジェツロでの結果は五位で、鈴鹿では二位だった。F1ドライバーを目ざす世界中の強豪が集まっているF3000レースでの五位はともかく、鈴鹿のF2での二位は彼には不満だった。彼は日本のレーシング・ドライバーの中では自分が第一人者だと思っていたし、まわりからもそう見られていたからである。

しかしヨーロッパと日本のあいだを飛行機で行ったり来たりし、時差の調整をする時間もないままレースに出なければならぬという強行スケジュールの不利はどうにもならなかった。鈴鹿でのレースのまえに、彼が目をしょぼつかせ、朦朧^{もうろう}とした様子でピットにたたずんでいると、ラ

イバルの星野一義は同情した面持ちでこういった。

「おまえ、そんなふうでよくまともに走れるなあ」

優勝したのはその星野一義だった。

中嶋悟はくたくたに疲れていた。しかし日本のF2レースにだけ出ていれば誰にも文句をいわれずに第一人者としてふるまっていられるのに、それでは満足できずにどうしてもヨーロッパに出て行こうと決心したのは誰のすすめによるものでもなかった。ほかならぬ彼自身だったのである。いまさら泣きごとはいっていられなかった。

電話を受けたのはそういうときだった。

電話は本田技術研究所の桜井淑敏からだった。彼は本田技術研究所ではもっとも若い四十一歳の取締役で、ホンダのすべてのレース活動を統括している総監督だった。

「これからすぐに研究所へきてもらいたいんだが」

とその声はいった。

「話は何ですか」

と中嶋悟はいった。

「こっちへきたら話す」

話はそれだけだった。

中嶋悟は緊張した。受話器を置いたあとで彼がまず最初に思い浮かべたのは、F3000がどうにかなくなってしまふのではないかということだった。彼も一九八六年になって円とドルのレートがとつぜん一ドル二百四十円から百六十円の超円高になり、そのために輸出産業の自動車会社の利益が激減しつつあることぐらいは承知していたからである。ホンダがF1だけに集中する

ためにレース活動を縮小し、F3000からは撤退する方針を決めたのかもしれないことは十分に考えられることだった。

「そんなことになったら困るな」

と中嶋悟は思った。

彼はこのときまでにヨーロッパでのF3000レースを四戦消化していたが、イタリアのバレルンガとムジェツロとともに五位になったのが最高で、自分で完全に満足できる成績はまだ一度もおさめていなかった。レースはこのあとにまだいくつか残っていたが、こんな成績のままでせっかく出て行ったヨーロッパからすぐと引きあげることが、彼のプライドが許さなかった。それに彼は、もしそんなことになったら、日本のサーキットに集まる意地のわるい連中につきぎのようにいわれるだろうと知っていた。

「日本でレースをやっているだけじゃもの足りないといって、ヨーロッパに出かけて行ったやつは何人もいるが、誰一人向うでは勝てなかった。みんな、ただ行っただけさ。やつもやっぱり同じだったな。これですこしは高い鼻が低くなるだろう」

くそ、と思った。彼はヨーロッパのサーキットに慣れ、ちゃんと走るコツをつかむまで、もう一年ぐらひはヨーロッパでレースをしたかった。

彼は支度を整え、ホンダ・レジェンドのハンドルを握ると、東名高速に乗って埼玉県和光市にある本田技術研究所に向った。彼はレーシング・カーばかりでなく、車そのものを運転するのが好きだったので、何時間かかるドライブもちっとも苦にならなかった。彼は人に趣味は何かときかれると、いつも大真面目に車を運転することだと答えていた。

数時間後、本田技術研究所に着くと、彼は桜井淑敏の秘書に応接室に通された。そこには家を

出るまえに連絡しておいた彼のマネジャーの福田直道がさきにきて待っていた。

「何の話だろう」

と中嶋悟は福田直道にいった。

「さあ、ぼくもわかりませんね」

と福田直道はいった。

「F3000をやめるという話だろうか」

「どうでしょう。そんなことはないと思うけど」

二人が不安な面持ちで待っていると、やがて桜井淑敏がやってきた。彼もひどく疲れたような顔をしていた。彼は七月六日にフランスのポールリカルでおこなわれたF1のフランス・グランプリから帰ってきたばかりだった。

「また勝ったそうですね」

と中嶋悟は桜井淑敏にいった。

ウィリアムズのシャシーに積まれたホンダ・エンジンは、フランス・グランプリの勝利ではやくもシーズン四勝目をあげていた。全十六戦のうち八戦で四勝だった。

「中嶋さんがテストをしてくれているおかげですよ」

と桜井淑敏はいった。

中嶋悟は八五年から鈴鹿でウィリアムズ・ホンダの実走テストをおこなっており、八六年も日本に帰ってくると過密スケジュールのあいまをぬってそれをつづけていたのである。そのおかげだといわれると、自分もF1グランプリに参加しているような気がして、とてもいい気分だった。しかし来年はそのテストをするだけになってしまうのかもしれないと思うと、ちょっぴり気が滅

入った。

「中嶋さんは、このところずっとスタートがまずいという話をきくけど、どうしてなんですか。何か原因があるんですか」

桜井淑敏がいった。

中嶋悟のここ数年のスタートのまずさは、いまや日本のサーキットでは有名だった。ポール・ポジションをとって先頭のグリッドに並んでも、ギヤをいれるタイミングがわるかったり、ホイール・スピンをさせたりして、スタートで遅れてしまうのである。ヨーロッパのF3000でもおなじ失敗をおかし、せっかく上位のグリッドに並んでも、スタートで最後方に落ちてしまうということが重なっていた。デビューしてからしばらく、サーキットに集まるレース・ファンの目をみはらせていたころの彼からは考えられないことだった。

「それはですね」

中嶋悟は胸をドキドキさせながらいった。

「日本のレースでは、余裕を持ちすぎちゃっているからじゃないかと自分では思っているんですけどね。あとで考えてみると、横に並んだドライバーの様子を見ちゃったり、余計なことをあれこれ考えちゃったりしてるんですよ。F3000のほうは、ラルトのシャシーのチェンジ・レバーの位置がぼくに合わないんです。だからいまいろいろ調節してるところなんですけど、こっちはちゃんとぼくに合うようになれば心配ないと思いますよ」

「ふうん。じゃあ、精神集中さえうまくできれば何も問題はないんですね」

「ええ、そうです。ぜんぜん問題はないと思います」

中嶋悟はきっぱりといった。そんなことでF3000失格の烙印を押されたのではたまらない

からだった。

「それならいいけど、もしF1でスタートに失敗したりしたら死んじゃうよ」

「F1? F1て何のことですか」

「まだ公表はしてないんだけど、来年はウィリアムズのほかにロータスにもエンジンを供給することにしたんですよ。それでロータスにセカンド・ドライバーとして中嶋さんを推薦したら、歓迎するといってるんだけど、どうしますか?」

「どうするって、桜井さん」

中嶋悟はニヤニヤ笑いながらいった。

「からかわないでくださいよ。ぼくがロータスのドライバーだなんて、ひどいな」

「からかってなんかいないよ。ほんとにロータスはオーケーしたんだよ」

「嘘でしょう」

「嘘じゃないよ。信じないのか」

「信じられませんよ」

「どうして」

「だって夢みたいな話じゃないですか」

「夢だって何だっていいよ。とにかくロータスは承知したんだから。どうするんだよ」

中嶋悟は茫然とした顔でしばらく桜井淑敏を見つめていたが、やがてちょっと待ってくださいというトイレに走って行った。

彼はそこで自分の顔を鏡に映して見た。そこにはいつもと変わらぬ自分の顔が映っていたが、何だか見知らぬ他人の顔を見るような気がした。自分がF1ドライバーになるなんて、どうして

も夢としか思えなかった。

彼は再び応接室に戻ると、マネジャーの福田直道にいった。

「ちょっと俺のほっぺたをつねってみてくんねえか」

「何を漫画みたいなこといってんですか」

と福田直道はいった。

「いいから、つねってみてくれよ」

福田直道は中嶋悟の頬をつねった。

「痛っ。こりゃ、夢じゃねえや」

と中嶋悟はいった。

「返事は？」

桜井淑敏は完全に気が動転しているらしい中嶋悟に再びいった。

「どうしますか」

中嶋悟は桜井淑敏の顔をもう一度たしかめるように見つめ、それからゴクリと唾をのみこむと、ちいさな声で精一杯の元気を出していった。

「断わるわけないでしょ」

「よし、じゃあ決まった」

と桜井淑敏はいった。「ロータスのほうでは、七月十三日のイギリス・グランプリが終ったらすぐに契約したいといってるから、急いでイギリスに戻ったほうがいいよ」

「契約書は？」

「彼らがつくってますよ。連中の気が変わらないうちに、さっさとサインしちゃうんですね」

「ぼく、まだF1のドライバーのスーパー・ライセンスを取ってないんですけど」

「ああ、それは心配ないですよ。こっちで調べたら、中嶋さんはちゃんと条件を満たしてるから」

国際自動車連盟のスポーツ委員会(FISA)は、F1ドライバーのスーパー・ライセンスを与える条件として、インターナショナル・フォーミュラ・レースに通算十回以上出場しているか、あるいは年間にそのレースで五位以上に五回入賞しているかという、かなりきびしい制約を課していた。中嶋悟はどちらの条件も満たしていた。鈴鹿サーキットでおこなわれるF2レースは全レースが国際規格のレースで、彼はすでにそれに何十レースも出場していたし、年間に五位以上に五回というのも数えきれぬほど記録していたからである。

「しかしそれだけだときつとクレームがついたと思うんですね。国際規格のレースといっても、日本国内だけのレースだからね。何といってもF3000レースに出ていたのがよかったんですよ」

とあとになって中嶋悟はいつている。

彼は一九八六年の記録でも、このときまでに鈴鹿の三つのF2レースで優勝一回、二位に二回なっており、加えてヨーロッパのF3000でもすでに二度五位になっていたので、完全にスーパー・ライセンスの条件を満たしていた。

中嶋悟は桜井淑敏と別れ、イギリスに戻る日程などを打ち合わせて福田直道とも別れると、再びレジェンドに乗って岡崎に帰った。しかし自分に訪れたとつぜんの幸運を、まだ本当に現実のものだとは信じられなかった。こういうときにともに喜びをわかち合うべき妻は、幼い子供と二人でいまはそちらが本拠となったロンドン郊外のアパートで彼の帰りを待っていた。

「おれがなあ、F1ドライバーとはなあ」

と彼は一人で思った。

F1ドライバーになることは、彼の長年の夢だった。とくに国内で第一人者となつてからの数年はその夢が大きくふくらみ、そのためには十分な海外遠征資金がなければならぬと思つて中嶋企画という会社をつくつたり、そのときになつてまごまごしないように英語の勉強をしたり、体力をつけるために毎日5キロのランニングをしたりして準備を整えてきていた。

しかし現実には失望の連続だった。彼が日本のレーシング・ドライバーの第一人者だと知ると、毎日のようにいくつかのF1チームがうちの車に乗らないかと甘い誘いをかけてきた。だがそれらはいずれもアロウズとかトールマンといった万年下位低迷チームで、彼らはいつも慢性的な資金不足に悩んでいたもので、最後に必ずつぎのようにつけ加えることを忘れなかった。

「きみが自分で三百万ドルばかり出すか、さもなければそれに見合つた金を出す日本のスポンサーを連れてくれば、あすにでも契約できるよ」

彼には受けいれるのが不可能なまったく非現実的な誘いだった。彼はがっかりし、F1ドライバーになろうという夢は捨てなかったが、心の底ではその実現をほとんどあきらめていた。たぶんチャンスは永遠に訪れないで、そのうち年をとつてしまふだろうと思つていたのである。しかしじつさいに実現してみると、それは信じられないくらいにあつてなかった。

資金も自分で出す必要はなかった。桜井淑敏によれば、ロータスは反対に契約金を払つてくれるというのだった。その額は彼がF2ドライバーとして日本国内で稼いでいる金額よりもずっとすくなかった。だがすくなくとも契約金は契約金だったし、第一、金はあまり問題ではなかった。彼の第一の目的は金ではなかった。彼はプロ野球やプロゴルフの選手を見ていると、彼らがア

メリカという日本よりあきらかにレベルの高い世界があるのに、どうしてそこへ行って本格的に戦おうとしないのか不思議でならなかった。彼らは日本でプレーしていても五千万も六千万も稼ぐが、それだけで満足なのだろうかと思うのである。彼は満足できなかった。日本国内で第一人者としてレースをしていたほうがあらゆる点で都合なのに、わざわざヨーロッパに出かけて行ってF3000に挑戦したり、実現するとは思えなかったF1ドライバーになることを目標にして努力してきたのは、すべてそのためだった。より上の世界で自分がどれだけのことができるか知りたかったのである。

夢が現実になったいま、彼はおれはいいたいだけのことができるのだろうと思った。一九七三年に鈴鹿シルバークップ・シリーズでレース・デビューをしてから十三年がたち、彼は三十三歳になっていた。アラン・プロストより二歳年長で、ネルソン・ピケより一歳若かった。しかしF1ドライバーとしてはまったくの新人だった。いまや喜びでふわふわした気持はすっかり消え去り、かわって頭の中に不安と心配が広がり始めるのをどうにもできなかった。

その気持をすこしやわらげてくれたのが、生沢徹からの電話だった。それからしばらくして、どこから話をきいたのか、まっさきに祝いの電話をくれたのである。

「願いがかなってよかったな。おめでとう」

と彼はいった。

中嶋悟はびっくりした。生沢徹とは数年前に彼のチームのドライバーとして走っていたときにいろいろあって、それ以来あまり話もしていなかったのである。その彼が誰よりも早く祝いの電話をよこしてF1ドライバーになることをよろこんでくれたのだった。

「頑張れよ」

と生沢徹はいった。「おまえならきつとやれる」
中嶋悟はともうれしく、体がぞくぞくした。